ユニセフ活動の現場を訪ねて

SPECIAL REPORT

ラオス

シェンクァーン県

ラオスと聞いても、その場所を明確に答えられる人は意外に少ない。中国、ベトナム、ミャンマー、タイ、カンボジアに囲まれたインドシナ半島の内陸の国、ラオス人民民主共和国は、日本の本州とほぼ同じ面積である。その中に約470万の人々が、農耕生活のもと、世界の関心を集めるベトナムやカンボジアの陰でくらしている。ラオスは、古くは隣国のビルマ（現ミャンマー）、シャム（現タイ）に侵略され、その後、フランスの植民地支配を受け、ベトナム戦争中はアメリカ、ソ連をはじめとする外国勢力に蹂躙され、特に北部は焦土と化して、今もその傷跡は深い。にもかかわらずラオスは、穏やかな国民性からか寛容な心をもつ人々と称されている。

後発発展途上国として世界最貧国の一つに数えられているこの国も、社会主義国ながら1986年以来、自由主義経済に移行し、徐々に変貌を遂げつつある。

次に、去る11月末に実施した日本ユニセフ協会のスタディツアーで視察したラオスのシェンクァーン県でのユニセフ活動の様子を紹介する。（→P.2）

ラオスメモ

LAOS

◆日本からのアクセス

成田
⇩ 7時間（飛行機）
バンコク
⇩ 1時間（飛行機）
ビエンチャン
⇩ 40分（飛行機）
シェンクァーン
⇩ 2時間（車）
カム郡、ペック郡（現地）

◆時　差　2時間

5歳未満児死亡率（千人中）	138
安全な水を入手できる人の比率（全国）	45%
成人の識字率	男 65% 女 39%
小学校の純就学率	男 66% 女 53%
小学校の第1学年に進学したものが第5学年に在学する率	53%
1人当たりのGNP	280米ドル

ユニセフ「1996年世界子供白書」より

unicef

SPECIAL REPORT

ラオス

予防接種広まる

車で行くことのできる地域には、行政やユニセフの協力で予防接種がかなり浸透しはじめた。子どもを抱いた母親たちの表情は真剣そのものである。ここでは、ユニセフの研修を受けた保健ボランティアによって乳幼児や妊婦への接種がされていた。

シェンクァーン県での93年から最近への接種率の伸びは目覚ましく、ポリオは7%から87%へ、はしかは29%から87%、BCGは24%から75%へ等々躍進している。次の課題は、山間僻地の村々へどうアプローチしていくかである。

薬品の常置

医療の状況は厳しく、山がちな地形と道路の少なさからラオス全人口の3分の2は医療サービスを受けることができない。そこで、ユニセフは村ごとに16種類の応急薬品を用意した薬品戸棚の配備をすすめている。もちろん、薬品だけでなく簡単な保健の知識をもち、使用の方法を習得した村の保健ボランティアの育成も欠かせない。この薬の常置で多くの人々の命が救われているという。

少額融資制度の導入と技術指導

生活の大半が、特に、水くみ、農作業、育児と家事に一日中追われてしまう。5歳未満児の死亡率が1000人中138人と多い上に貧困と労働のきびしさから、ラオスの人たちの平均余命は、51歳で、タイの69歳、ベトナムの65歳に比べて短い。そこで、ユニセフは生活を少しでも豊かにと、織物や家畜の飼育、家庭菜園の技術指導を行ったり、日本円にすると何千円かの少額融資を行ったりしている。写真の女性は、ラオスの民族衣装の巻きスカートの美しい裾模様を織っているところである。このような支援と村人たち自身の努力により確実に生活が向上している。

恐ろしいマラリア

子どもの間で毎年50万人以上のマラリア患者が出る。総人口470万人から見ればいかに多いかわかる。発症率の高い地域で子どもが5～6歳まで生き延びられれば、高い免疫力をつけるだろうが、現実はマラリアは死亡・病気の大きな要因である。マラリアを防ぐには、蚊帳の使用が効果的である。しかし、蚊の害に対する認識が低いことと貧しいことから、普及率は100軒中1軒のみ。ユニセフの支援により、写真のような防虫液に浸した効果的な蚊帳などが普及し始めている。

安全な水の確保

安全な水の確保は緊急の課題で、子どもや女性が労働を強いられるだけでなく、汚染された水によって生命さえ脅かされる。事実、多くの子どもが下痢で命を落としている。きれいな水を得る井戸をつくることは、保健衛生、労働時間、教育時間の確保など生活全般によい影響を及ぼす。井戸は1つ2万円でできるという。1992年にユニセフにより2台の井戸掘削機が導入され、村ごとに1つの手押しポンプ井戸を設置しようと図っている。

教育、着々と進む

ラオス全体としての就学率は上がってきたが、就学児の約半数が基礎の5年を修了するのみで、他は中途退学で識字能力を身につけないままである。なかでも、山岳地帯や奥地では、地理的に孤立し学校に通えなかったり、教員がいなかったりして未就学を余儀なくされている。しかし、国としては1997年までに就学児の70%が初等教育を修了するよう目指している。ユニセフは、教育に力を入れる国の政策に合わせ、教育のプロジェクトを推進している。特に、村の主体的な参加を促すため、学校建設に際しては、費用の約50%をユニセフが負担し、地区の行政と村が約50%の費用と労働力を提供するようにして、自分たちの学校という意識を育てている。屋根用のトタン板や釘などを調達するため、学校1校当たり約22万円を必要とするが、ユニセフは毎年約80の学校をつくろうとしている。

村の学校

•その1

屋根と腰板で囲っただけの学校ではあるがみんな元気に勉強していた。ここの先生は正規教員ではなく村で一番教育を受けたという女性が務めていた。ここは1～2年生のみで3年生以上は隣の村の学校へ行く。

•その2

ここは、草屋根、板壁の校舎、同じ敷地内に、ユニセフによるトタン屋根の校舎が混在していた。いずれも窓はない。板を打ちつけただけの壁も隙間が多く、雨が降ったり風が吹いたりしたら、大変だろう。とはいえ、子どもたちは最新のカリキュラムによる教科書で学んでいた。